

挨拶

創立五十周年を迎えて



会長 大野祥雲

筆の友書道会は創立五十周年という大きな節目の年を迎えました。この機会に、本会の創立の精神、草創期からの足どりなどを確かめ、これをバネとして更に力強い前進を期していくことは意義深いことだと思います。

本会は前会長の松岡雲峰先生が、戦後の動乱期にいち早く書写・書道教育の重要性を説かれ、賛同する先生方と共に、昭和二十六年高知県書道教育研究会（後、筆の友書道会と改称）を創設されました。

昭和二十六年と言えば、小学校の正課から姿を消していた毛筆指導が、四年生以上の学年で学校選択として復活。中学校では国語科習字となり、高等学校では芸能科から芸術科書道へと移行。つまり戦後の教育界の混乱から何とか脱却して立ち上がらんとする時期に、筆の友書道会は呱呱の声をあげたといえましょう。二年後の昭和二十八年、国民の書写力の向上を願い伝統に立脚した用美一体の書写・書道教育を指標とし、会誌「筆の友」を創刊。松岡先生のねらいは県下各地に浸透し、定着していきました。これひとえに雲峰先生をささえてこられたご家族、それに諸先生方のご愛顧の賜であり深く感謝申し上げたいと思います。

また静かに顧みますと、本会のためにご尽力下さり、今は亡き先生方のお顔が眼前に浮かんでまいります。会員の皆様と共にそれらの方々に感謝しき冥福をお祈りいたします。

筆の友の発展と時を同じくして、我が国は高度の経済成長をとげ、物質的

には豊かな国になりました。反面、競争社会の激化で心の安らぎを見失うこともあったようです。特に最近は激動期に入り、内外共に歴史に残る大事件が続出。政治、経済、教育、文化をとりまく環境は大きな転換期に入っています」といえましょう。

IT時代、少子化、総合的な学習など筆の友の草創期には耳にしなかつたであろう言葉が次々と生まれ、急速に身近なものとなりました。キーを打てば文字が生まれ、印字され、プリンターからは製本されたものまで出てきます。「手書きの必要もないし、便利な時代になったものだ」と喜んでいいいいのでしょうか。また、「日本人は文字を書かなくなつた。文字を忘れた。結局、日本は文字を失うのではないか。」との声も耳にしますが聞き捨てにすることはできません。

文字が日本の伝統文化を築いてきたことを思う時、書写・書道教育に携わる者にとってその責務は大きいと思います。

「書写能力の向上は学習能率や学習意欲を高める」との研究成果も出ていますが、今の時代になぜ「書写・書道教育が必要なのか」「書写・書道でなければできないことはなにか」を常に考えながら取り組まなければなりません。幸い本会はそれに立ち向かっていける人材の集団です。日本の文字を正しく手書きでき、文字を大切にする子どもを育てることが急務だと思います。さらに芸術にまで高めていく方が多くなることを願うものです。

筆の友書道会は創立五十周年を機にこれまで以上に努力し、書写・書道教育（書芸術を含む）が益々盛んになるよう前進していく所存です。

今後ともより一層のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

平成15年7月